

「感覚」による「意識」を記録する  
-小川洋子「妊娠カレンダー」論-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学大学院 公開日: 2021-11-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 若葉 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10291/22025">http://hdl.handle.net/10291/22025</a>

## 「感覚」による「意識」を記録する

——小川洋子「妊娠カレンダー」論——

Recording “consciousness” caused by  
“senses”

——Yoko Ogawa “Ninshin Karenda”——

博士後期課程 日本文学専攻 二〇二一年度入学

太 田 若 葉

OTA Wakaba

### 【論文要旨】

「感覚」は、曖昧なものである。小川洋子の著作の特徴として挙げられる「感覚」表現は、その曖昧さゆえに、批判されたり、別の言葉に交換することに拠って明確化されたりしてきた。一九九〇年九月に発表された、芥川賞を受賞した「妊娠カレンダー」も、例外ではない。登場人物である「わたし」の行動は、「理解が出来ない」と批判され、研究者の間では、「わたし」には「悪意」があるのか、それともな

いのか、という議論が重ねられてきた。

本論では、「感覚」表現とは、はたして読むことが出来ないものなのか、または、別の言葉に変換しなければ理解が出来ないものであるのかを問い直したい。

「感覚」表現が内包する、身体感覚を介した表現には、「感覚」を受け取る当事者が、認知しているが、気に留めなかった（留めることが出来なかった）、または言語に変換して語ることをしなかった（成し得なかった）事象に対する、「違和感」の発露が含まれていると考える。それらは、先のような検討の方法では、理解がしきれない。

「感覚」表現の内部を詳細に検討し、歴史の中に位置づけながら、それらの奥に潜む「意識」を捉えることで、これまで読むことが出来なかった曖昧な「感覚」を確かに存在する「意識」と共に示す。

【キーワード】小川洋子、感覚、記録、言葉、物語

### おわりに

「妊娠カレンダー」に「悪意」という表現を冠したのは、黒井千次、吉行淳之介、田久保秀夫らの芥川賞選評（一九九一年三月）（注1）が最初であり、「悪意」という言葉を巡る議論は以降の作品評価にも影響を与え続けた。

ここで言われる「悪意」とは、「わたし」の行動に対する表現である。テキストは、「姉」の妊娠を観察し、記録し続けた妹の「わたし」の観察日記の形になっており、読者は、「わたし」の観察日記を盗み見る形

で、テキストを読むことになるのだが、「五月二十八日(木)」、言い換えると姉の妊娠が分かってから「二十七週+三日」の記録の中で、「わたし」は「姉」にグレープフルーツのジャムを作り、食べさせる。

「わたし」は「地球汚染・人類汚染を考える会」の会合」で貰ったパンフレットの記憶から、グレープフルーツの皮に含まれるPWHという有害物質が胎児に影響を与える可能性を知りながらも、皮を入れたグレープフルーツジャムを作り、姉に与え続けたのだ。「胎児の染色体」の破壊を想像しながら…。

先行研究では、芥川選評での議論を引き継ぎ、この「悪意」という言葉をめぐる論考が重ねられてきた。例えば川村湊（一九九一年『文学界』）は「つまり、そこにあるのはすべて心理や生理に還元されそうでありながら、結局はどこにも、何にも還元することのできない曖昧な領域での『悪意』『害意』であり、時には『殺意』なのである。」（注2）と述べ、「わたし」には「曖昧な領域での『悪意』『害意』」「時には『殺意』があると言う。

綾目広治（二〇〇九年『小川洋子 見えない世界を見つめて』）は「妹の行為は『悪意』から出たものであろうか。あるいは、それは『悪意』というほどのものであるか。」（注3）と、問題提起した後「『悪意』は『赤ん坊』に限定されて向けられているというよりも、あるいは姉に対して向けられていると言えるのではないだろうか。」と述べつつ、小川の描く人物が「無機質のような生への憧れ」を持つことを例に挙げ、さらに、「わたし」は、「生活を混乱に巻き込んだ」（「妊娠―出産」と言う事態）に、「単に反感の次元で動いていただけである。だから、

それは「悪意」というほどのものでもない。」と結論付けている。

このような「悪意」をめぐる論考に対して、本論では、「わたし」の行動について「『悪意』かどうか」という評価軸を持ち続けてテキストを解釈するのではなく、「わたし」が五感で感じる「感覚」、身体感覚に着目する。

テキストに記される、世界を五感で切り取った「わたし」の語りを詳細に読み、そこに内包される身体感覚に隠された「わたし」の「意識」を読みみたい。

小川は、新芥川賞作家 特別インタビュー『文学界』（注4）で前作品「冷めない紅茶」と受賞作「妊娠カレンダー」を並べ、以下のように述べている。

生きているか、死んでいるか、正常か異常かという境界線のない世界の話ですからね。それを無理やり現実の世界にひっぱりおろしてきて、結局妹はあたまがおかしいのか、おかしくないのか、あるいはK君たち二人は生きているのか、死んでいるのかという、その判断をつけるためには、彼らを一度小説世界からひっぱりだしてこないとその判断はつかない。つまり、つける必要がないと言い切れるところまで私は書きたいんです。そのためには、小説の中の現実の余程のパワーがないといけない。日常の生活をそのまま横すべりさせるだけでは、何も見えてこないと思うのです。日常を異化させるなり、離陸させるなりしないと。

このインタヴューで、小川が作品に「境界線のない世界」を描こうとしていること、さらに境界線のありかについては、「判断をつける」「必要がないと言い切る」事を目標に、創作活動をしていることを明らかにしている点について注意したい。

小川は、自身の「小説世界」の中に生きる人物が、「生きているか、死んでいるか」また「正常か異常か」という評価をすることについて否定している。そして、「小説世界」という虚構でしか表すことのできない、人間の、ともすれば曖昧と評されるような状態を、「日常を異化させるなり、離陸させるなり」して描こうとしているのだ。

小川文学でなされている異化や、離陸の方法として、挙げられるのは、「感覚」表現の多用ではないだろうか。小川は、登場人物の「感覚」をさまざまな身体感覚を用いて表現している。そして、これらの身体感覚は、登場人物のさまざまな「意識」を含み持つて描かれる。

それゆえ、「妊娠カレンダー」に描かれた「わたし」の「感覚」は「悪意」などのような感情を示す言葉では表現することの出来ない、人間の「意識」を表現していると考えられるのだ。

「感覚」表現は、既存の言葉では表現することが出来ない、「感情」になる前の、または、「感情」にならない、「意識」を描くことを可能にする。同時に「意識」が、確かに存在することを記す役割を果たしている。

「感覚」表現を用いて「意識」を描く「妊娠カレンダー」の世界には、既存の言葉の概念が排除されている。つまり、「悪意」かどうか、という既存の言葉で作られた境界線は存在しないのだ。

境界線が存在しない世界を描く小川文学は芥川賞選評（一九九一年三月）で、「曖昧」であると批判の対象になった。対して高根沢紀子は二〇〇三年一月『国語教室』に「小川洋子作品の魅力」という論考の中で、「妊娠カレンダー」は（つわり）の原理がそもそも解明されていない（分からない）ように、また、そもそも《妊娠》が別の命を持った他人に宿を貸している、異物感を伴うものであるように、まさに《妊娠》そのものの原理を描いた小説なのである。だからこそ「曖昧」なのであり、その「曖昧」さは（現実的な手ごたえ）を十分に持っているのだ。」（注5）と述べ、小川文学の世界における「曖昧」さを「現実的な手ごたえ」があると評価したが、「現実」の内実、つまり「妊娠」という現実の状況を表す言葉の解体はしなかった。さらに高根沢は、二〇〇三年に「妊娠カレンダー」単体を論じ、こちらでは「曖昧」さを描く意味として、「妊娠カレンダー」はまさに《妊娠》そのものを描いた《妊娠原理小説》であり、それを描くことによって「読者が《妊娠》を体験させられる」としている。テキストで描かれる「曖昧」さは、「妊娠」そのものであり、妹の「わたし」や「違和感の表明」をする読者は実際に妊娠をしていなくとも体験することが出来るということが、このテキストの「（現実的な手ごたえ）」であるという。（注6）

こちらの論考では、妊娠周期の記述と、母子手帳の相関性から、テキストに描かれるのは「制度的な《妊娠》である」と述べ、テキスト全体を通した「（カレンダー）性」への解釈を行っているが、結局は「妊娠原理」という言葉への集約に留まっている。

本論ではテキストの「（曖昧）さ」に価値を見出したという意味で、

高根沢の問題意識を引き継ぎつつ、そこではなされなかった「曖昧さ」の内実に迫りたい。「妊娠カレンダー」というテキストには「妊娠原理小説」という言葉、一言で表現してしまうには、抱えきれない「感覚」が刻み込まれていて、それらがテキストを曖昧にしていると考える。「感覚」表現は、本来はその「感覚」を持った者のみが実感を伴い得るし、自分の「感覚」を正確に他者に説明することは不可能に近い。しかし、「感覚」が刻まれた「物語」テキストは現実世界ではあいまいに理解されないまま忘れられてしまうような、「感覚」を書き記し、読者に「感覚」を読むことを可能にすると考える。

「妊娠カレンダー」で、「わたし」の「感覚」は、「わたし」の語りによって再生されているのだ。

本論では焦点を語り手である「わたし」に絞り、細部に記載された「わたし」の「感覚」表現の内実を捉える。「わたし」が記録する「妊娠カレンダー」に詳細に記録された「感覚」を、一つ一つ考えることが、「わたし」の「感覚」を、無かったことにせず、そこに確かに存在したものと読むということになると考えるからだ。

## 1、M病院という場所

テキストは「十二月二十九日(月)」に「姉がM病院に行った」という「わたし」による記録からはじまる。「わたし」は、姉が「M病院」に掛かることに反対していたことを記述し、その後自らの「M病院」に関する思い出を記録することになるのだが、内容は次のようになっていく。

M病院はわたしたちの祖父の代からそこにある、産婦人科の個人病院だった。わたしたちはよく、その中庭に忍び込んで遊んだ。病院は古い木造の三階建てで、表から見ると苔の生えた掘や消えかけた看板の文字や曇ったガラスのせいで陰気臭いの、裏から中庭に入るとそこにはたつぷりと日が差し込んでいて明るかった。そのコントラストが、いつもわたしたちをどきどきさせた。

中庭はよく手入れされた芝生が敷きつめられ、わたしたちはその上をごろごろ転がって遊んだ。芝の尖った葉先の緑と、太陽の光のきらめきが順番に視界を覆った。そしてだんだん緑ときらめきが目奥の方で混じり合い澄んだ藍色になっていく。すると空や風や地面がわたしの身体からすうっと遠のいて、宙を揺らめいているような一瞬が訪れる。わたしはその一瞬をとめて愛していた。

しかし何よりわたしたちを一番夢中にさせた遊びは、病院の中をのぞくことだった。わたしたちは庭の隅に捨てたガーゼや脱脂綿の段ボール箱を台にして、窓から診察室をのぞいた。

この回想から、幼いころの「わたし」にとって「M病院」という存在は二面性を持ち得ていたことがわかる。一方では、太陽によってきらめく芝生で寝転んで遊んだときに感じた、愛すべき身体感覚を保有する場として存在し、もう一方では、「姉」と共に、周囲を気にしながらものぞきみるような、魅力的かつ、神秘的な雰囲気に伴う場として存在していたのだ。

「姉」と「わたし」は同じように「M病院」を覗くが、両者は微妙に

異なっていた。

「わたし」が「見つかったらきつと怒られるよ」と「臆病」になるのに対し、「姉」は「大丈夫。わたしたちまだ子供なんだから、そうひどく怒られたりしないわよ」と「息で曇ったガラスをブラウスの袖口でぬぐいながら、平然と」言う。

この二人の描写からは、姉妹である二者の差異が見える。「M病院」の内部を覗くことに対する背徳感を抱き、行動に移すことをためらう「わたし」とそれを気に留めない「姉」だ。

姉妹が覗いていた「M病院」は「祖父の代からそこにある、産婦人科の個人病院」であり、女性の出産の現場、つまり、〈女性が母になる〉場所である。MはmotherのMと解釈することも可能であろう。「M病院」を「のぞく」ことに夢中になっていた姉妹の興味は、単に病院の中を気にするのみでなく、出産とはなにか、妊娠とは何か、という、〈女性が母になる〉ということの内実に対する具体的な興味であると考えられる。

一方で、「わたし」の用いた「のぞく」という言語表現には、見てはいけないものを見るという意味合い、また、見てはいけないと分かりながらも対象物を見たいという欲望が隠されている。

「わたし」と「姉」は、揃って「M病院」をのぞき見をしながらも、「姉」は〈女性が母になる〉という、子供にとって未知の領域、つまり「M病院」という「曇ったガラス」に包まれた領域を「ブラウスの袖口で拭って」積極的に見ようとするのに対して、「わたし」は内部、つまり〈女性が母になる〉という未知の領域をのぞき見る遊びに「夢中」に

なるが、同時に、のぞいてはいけないものだという「意識」を持ち合わせている。そのため、実際に見る際に、「臆病」になるのだ。

「わたし」の持つ、〈女性が母になる〉領域を見てはいけないという「意識」は、何処から来たのだろうか。ここで、小川よりひと世代上の女性作家による、母になった女性が描かれたテキストを参照しながら考え、「わたし」の「意識」を歴史の中に位置づけてみる。

〈女性が母になる〉というテーマは、文学の中でたびたび描かれてきた。中でも津島佑子は、自身が実生活で結婚、妊娠、出産、離婚、を経験した作家であるが、離婚の二年後（一九七八年）に離婚女性の恋愛、妊娠を扱った『寵児』（注7）を書き下ろし、刊行した。刊行したその年に第一七回女流文学賞を受賞した「寵児」や、自身初の新聞連載を果たした「山を走る女」など、津島文学には、〈母としてのわたし〉が描かれることが多く、これは津島自身が「新生児の母親」をテーマにして書きたい」（注8）と述べていることから明白である。

石原千秋は講談社文芸文庫版の『寵児』の中に、「一九七八年のセクシュアリティ」という解説（注9）を書いている。「寵児」のテーマを、「女性の性欲に自意識を与えようとする試みだ。」と主張し、その根拠として、一つ目に、一九七八年の初出時における女性の自立の兆しを象徴する出来事を挙げている。流行語「結婚しない女」や 西武百貨店のコピー「女の時代」、厚労省の母乳キャンペーンを並べ、「寵児」の登場人物、水野高子の人物設定と重なっていることを確認しているのだ。二つ目に、水野高子の持つ「嫌悪」の対象が「高子の周囲の女性たちに」「母性」と思われるものであったことをテキストの言葉を挙げなが

ら、論じている。しかし、論の中で高子の「嫌悪」の対象は「母性」とは言えないと、すぐに否定をしている。「アイデンティティーの不安」からの「嫌悪感」であると言っている。高子の「アイデンティティーの不安」を象徴する行為として、彼女が「常に複数の女の影が見え隠れする」男性を選ぶことを挙げている。高子は「比べられることを求める」のだ。石原はこれが、「高子の密かな欲望」になっていると言っている。女の身体は、「男の欲望と男の視線とが作り出した」ものであり、「長らく女自身のものでなかった」こと、女性が、ヒステリーという、「高圧的な態度で振る舞いながら、にもかかわらず女を無視し得ないような感性を持った男の元で女に許された、身体による抗い」を経て、「大衆夜会の中で比べられることが宿命」になったことを順に述べ、女性史の中に高子のアイデンティティーを位置づけているのだ。

「寵児」に登場する、快楽に執着する母親、高子には、「成長による運命」つまり、女性が大人になるにつれ、比べられる対象になるということに対する「嫌悪」があり、さらにそれは娘の「成長」に対する嫌悪」になっていった。この「嫌悪」の行動は、時に「母性」という言葉に集約されてしまう。

石原は、「嫌悪」を、「寵児」というテキストの「無意識」であるという。「女が「本能」を選び取ることと、「成長」を拒否することとは、矛盾する」にもかかわらず、「無意識」が影響し、結果的に矛盾している人物像が描かれるのは、「時代が女性に与えた自意識の形」が起因するといふのだ。

時代は、女性に「無意識」をもたらし、「自意識」を与える。では、

「妊娠カレンダー」（一九九〇）に描かれる、「自意識」と「無意識」とはどのようなものであろうか。

テキストには二人の娘が存在するが、子どもの頃に母を（父も）亡くしているため、母を知らずに（母になる）娘、つまり「姉」の傍で、「姉」と共に母を知らずに育ち、（母になる）ということに対する「違和感」を持ち続ける娘、つまり「わたし」について考えることで、その答えを導く。

「わたし」は、結婚、妊娠をし、母になろうとしている「姉」を間近で観察しながら、（母になる）ということに直面しながらも、それを受け入れられず、時に「嫌悪」する。ここには、娘でもない、母でもない、「わたし」が存在する。

「妊娠カレンダー」初出の一九九〇年の流行語に、谷村志保のベストセラーのタイトル『結婚しないかもしれない症候群』（主婦の友社）（注10）が入っていることは見過ごせない。この本の内容は、結婚を一つの選択肢と考え、あえて結婚することを選ばなかった女性たちの声をあつめたものになっている。彼女たちは時代のもたらす「自意識」によって結婚しない事を選択していると考えられる。

一方、「妊娠カレンダー」には、「わたし」の自意識は描かれない。「わたし」の語りは、すべて日記のような記録に書き記されたものであり、その内容は他者の観察を描く記録が大部分を占めている。このような記録の中で描かれる他者と「わたし」との関わりには、ほとんどといっていいほど「わたし」の主張を乗せた発言は描かれない。「わたし」は常に自らがどう存在すればよいのかわからず疑問符を浮かべながら、

存在し、記録する。そして、その疑問は何一つ解決しない。

しかし、テキストの描写には「わたし」が確実に感じている、身体感覚が描かれている。この描写に着目することで、「わたし」の身体感覚を用いて描かれる「意識」を読むことが出来る。これらは、「無意識」ではなく、「感覚」では確実に感じ取る、「意識」として描かれるのだ。つまり、ここで描かれる「意識」は、本人が「感覚」を受け取っていることは理解しているため「無意識」とは異なるものであり、「無意識」よりさらに個人的な、細かなレベルに落とし込むことを可能にしている。ディラン・エヴァンスは、『感情』（二〇〇五年二月）（注11）の中で、「情動」という語を「感情」とほとんど同義の言葉として用いながら以下のように説明する。

「情動」は、本来なら、「脳の構造によってほとんど規定されるのだから、それらがどんな文化であれ本質的に同じであることは、まさに至極当然」のはずだ、と説明しつつ、しかし、日本語にある「甘え」という言葉が英語には存在しないことを例に挙げ、「情動」と言葉の関係に着目している。つまり、この差異は、「それぞれの文化に異なるニーズが存在することの反映」であり、さらに、それぞれの「文化の基本的価値観」が、「情動」の言葉を生み出すというのだ。

ここで、小川文学の方法が、テキストに「情動」（感情）を表す言葉が登場させる代わりに、身体感覚を表す「言葉」を用いることについて考えると、その理由として、「情動」（感情）という「文化の基本的価値観」の影響を受けた言葉を用いることを避けているから、ということが考えられるのではないだろうか。「文化の基本的価値観」は、時代

が与える「無意識」と密接に関わる。

本論では、身体感覚を表す「言葉」が示すものを、「情動」（感情）とは分けて、身体で感じる「意識」と定義したい。なぜなら、身体感覚を表す「言葉」を用いて語ることの企みに、「文化の基本的価値観」によって淘汰されてきた「情動」（感情）に視点を当てるが含まれると考えるからだ。

そして、この「意識」を身体感覚によって語ることは、「情動」（感情）の言葉を用いて語ることは対照的であると同時に、「文化の基本的価値観」の陰に隠れて「無意識」とされ、構造化されたものとはまた別の、語られることがなかった、または語ることができなかった、タブーともいえる「意識」の発露であると考ええる。

## 2、視覚が表す「意識」

テキストには、さまざまな「わたし」の身体感覚が描かれるが、まず、視覚、その中でも「ガラス」の向こうを見るという行為が広範囲に散見される。

姉は妊娠のことを、義兄にどう話したのだろうか。あの二人が、わたしのいない所でどんな会話をしているのかよく分からない。大體わたしには夫婦というものがうまく理解できないのだ。それは何か、不可思議な気体のように思える。輪郭も色もなく、三角フラスコの透明なガラスと見分けがつかない、はかない気体だ。

ここで記録されているのは、「わたし」のわからないものに対する「感覚」である。「わたし」は、実際には「夫婦」が理解できないのだが、その（わからなさ）がもつ身体感覚を「三角フラスコの透明なガラス」と見分けがつかない、はかない気体によって、目の前が曇る様子として比喩的に表現するのだ。

「二月六日（金）十一週＋四日」の記録では、「姉」が、つわりにより、匂いを嫌悪し乱暴に騒ぐ場面が描かれるが、そのような「姉」を「わたし」はこのように描写する。

姉は髪の毛をかきむしりながら大きな声を出した。興奮して、涙ぐんでいるようにさえ見えた。パジャマのズボンからのぞく素足が、ガラスのように冷えて透き通っていた。

「姉」の錯乱を受けた「わたし」はその場で、「ごめんなさい」と謝り、「姉」の言葉に耳を傾けるが、その後、記録に「どうしていいかわからなかった」と記述する。

「わたし」にとって、わからない対象はここでは「姉」であり、それは「ガラスのような足」として語られている。

この「ガラス」とは、「M病院」をのぞいていた際にも「わたし」と「M病院」の間に存在した。「妊娠カレンダー」においてガラスは、「わたし」が分からない対象を見る際に「わたし」と対象を遮る目には見えない隔たりのような存在として、機能すると言える。

「八月十一日（火）三十八週＋一日」の記録、つまり「姉」の陣痛が

始まった日であり、テキストにおける最後の記録だが、その日、「わたし」は「長い間記憶の中に閉じ込め」ていた「M病院」に再び足を踏み入れることになる、そして、その際に、かつては周囲を気にしながら、「のぞく」としかできなかった「M病院」を、「簡単に診察室をのぞくことができた。」と語る。そして、「のぞく」のみならず、「わたし」はついに「M病院」の内部へ入り、「新生児室」へ向かう。

わたしは三階に目をやった。ネグリジェ姿の女性が遠くを見ていた。肩の曲線がガラスに映っていた。ばらけた髪の毛が頬にかかり表情を青白い影にしていたので、それが姉なのかどうかよく分からなかった。彼女はくすんだ唇をわずかに開き、まばたきをした。涙を流す時のような、はかないまばたきだった。目を凝らしてもっとよく見ようとした時、ガラスで跳ね返った陽射しが視界をふさいでしまった。

わたしは赤ん坊の泣き声を頼りに非常階段を上った。一步一步足をのせるたびに、木の階段はつぶやくようにみしみし軋んだ。身体は暑くぐったりしているのに、てすりをつかむ掌と赤ん坊の声がすいこまれてゆく耳の中だけはひんやりとしていた。芝生がゆっくり足元から遠ざかり、その分光が濃く強くなっていった。

途切れることなく、赤ん坊は泣き続けていた。三階の扉を開けると、外の明るさが一瞬に遮られめまいがした。波のように寄せてくる泣き声に神経を集め、しばらく立ちすくんでいると、薄ぼんやり奥にのびている廊下が見えてきた。わたしは、破壊された姉の赤ん

坊に会うために、新生児室に向かって歩き出した。

ここには、「わたし」がわからない対象に出会う時に感じる、「感覚」が、それぞれ、一つずつ差異を持って記録されている。

一つ目に「わたし」は、「M病院を見上げた」が、「窓ガラスが全部一度にきらめいて、目が痛かった」と記録する。

ここで「わたし」は、痛みを覚えながらも、幼少期のように「M病院」を覗くことをためらうことなく、近くまで近づいていき、内部を「簡単に」「のぞくことができた」のだ。ここから、幼いころとテキストの現在時における差異、つまり、「のぞくこと」に対する抵抗がなくなったことがわかる。

二つ目に、「わたし」は「ネグリジェ姿」の女性を「目を凝らしてもっとよく見ようと」するが、ガラスが跳ね返す「陽射し」に遮られ、よくみることが出来ないことが記録される。ここからは、「わたし」には、現在もなおわからない対象が存在することがわかる。「M病院」を覗くことまではできたが、「ネグリジェ姿」の女性はガラスに邪魔されてうまく見ることが出来ないのだ。「ネグリジェ姿」の女性は、「わたし」が捉える妊娠した女性の象徴であると考えられる。つまり「わたし」は、〈女性が母になる〉場をみることは、「簡単」に出来るようになったが、その内部にいる妊娠した女性という存在については、未だ理解が出来ないのだ。

最後は、「わたし」が「新生児室」に向って歩き出す部分の記録である。「新生児室」は一般的に、ガラスで覆われていて、これまで「染色

体」としてしか想像できなかった「姉の赤ん坊」とガラス越しにはじめて対面する場所であることが想像できる。しかし、描かれるのは、歩き出すところまでであるため、「わたし」が、ガラスの向こうの、「姉の赤ん坊」をみる事が出来たのか否かは分からない。

しかしここで重要なのは、「わたし」が見るために「歩き出している」ということだ。「わたし」は自らの意志で「姉の赤ん坊」を見に行くのだ。

この一連の記録から分かるのは、「わたし」は、「M病院」という、〈女性が母になる〉場所について「のぞく」こと、つまり知ることには抵抗がなくなったが、まだ「わからない」部分が存在するということだ。その一つは、「ネグリジェ姿」の女性に表象される、妊娠を経験した「女性」であり、もう一つは、「赤ん坊」である。しかし、「わたし」は今まで通りわからないと感じるだけではなく、「歩き出す」という行動を選択する。それらのわからない対象に近づいていくために「歩き出す」のだ。「わたし」が、〈わからない〉対象として、間に「ガラス」を見ていたものに対する微妙な「感覚」の変化、「意識」の変化がある。

つまり、ここに描かれる「わたし」の視覚による身体感覚とは、「姉」「ネグリジェ姿」の女性、「M病院」に表彰される「母」に対する繊細な「意識」の変化を含む語りなのだ。

ここまで、「わたし」の視覚による身体感覚を見てきたことにより「わたし」の何層にも分かれた「わからない」感覚と、その変化を読むことができた。次章では、その「わからない」対象の内実について考えるために、触覚による身体感覚をみていく。

### 3、触覚が表す「意識」

テキストで「わたし」は、対象を「虫」に例えることが複数回あるが、その「虫」には、生々しい触覚の印象が付きまとう。「姉」が「M病院」に入院することを「反対」し、「もっと設備の整った大きな病院」を進めた「わたし」は、幼いころのぞいた「M病院」の内部を回想するときに、「先生が坐る机の上」にあった「洋梨型のゴム袋」を「なまめかしい昆虫」と描写する。

また、義兄の食べている「キイウイ」を「義兄は輪切りにしたキイウイを食べている。わたしはあの黒い種子の粒々が、小さな虫の巣のように見えて、どうしてもキイウイを好きになれない。」と虫に例えた後に、「義兄」の喋った、「君は大切な身体だから、無理して動かない方がいいよ」という言葉に対し、「彼はこんな分切り切ったありふれたせりふを、いかにも親切そうに喋る癖があるのだ。」と批判する。そして、「義兄」の言葉が出て来た場所である唇を「キイウイの透明な果汁で濡れた唇」と描く。

また、別の場面では「わたし」が前に「科学雑誌か何かで」見た「染色体の写真」が、「双子の蝶の幼虫が何組も何組も縦に並んでいるように見えた」ことが語られるが、その「蝶の幼虫」は「姉の赤ん坊」を考える際に「染色体」と共に想起される。

「三月一日(日) 十四週+六日」の記録に描かれる、「蝶の幼虫」は以下のように描かれている。「楕円形の細長い幼虫は、人差し指と、親指でつまむのにちょうどよい丸味を持ち、小さなくびれや湿っぽい表皮が生々

しく写し出されていた。」以上の「虫」の描写をみると、わたしの記録する「虫」は、生々しい触覚と共に想起されることがわかる。

「虫」に例えられている対象は、いずれも「わたし」と対立する対象であり、「好きになれない」対象であり、さらには、「破壊したい」対象である。「わたし」がこれらの対象になんらかの否定的な「意識」を持っていることは明白である。

「わたし」は具体的に何に否定的な感情を持つのかを語らないかわりに、この触覚による身体感覚にのみ、それらを吐露する。この「意識」は、「わたし」の記録の中で触覚を伴う「虫」に例えられることにより、意図せず、表出してしまっているのだ。

この否定的な触覚によって描かれる「意識」に着目すると、次の場面は見逃せない。「わたし」が義兄に歯の治療してもらった場面だ。これまで、触覚を伴って描かれてきた「虫」が、「わたし」の口の中に「虫歯」として表れる。

テキストには「口にする」という「言葉」が何度も現れるが、この「言葉」は、食事をとることと、言葉を発することという二つの意味で用いられている。(注12)「わたし」は自らの「感情」を既存の言葉に置き換えることに対し違和感を持ち、辞書的な言葉を使うことを避けるようになるのだが、このような、言葉に対立する態度を持つ「わたし」が言葉を話す際に使う「口」に虫歯を持つことは表象的だ。

「五月一六日(土) 二十五週+五日」の記録の中で、「わたし」は自分と「義兄」が初めて会った時のことを回想する。

「それでは、型を取らせていただきます。」

彼は丁寧すぎる口調でそう言って、わたしの顔の上におおいかさってきた。治療するのは一番奥の歯だったので、わたしは精一杯口を開けなければいけなかった。彼が顔を近づけて口の中に手を突っ込むと、消毒液のおいする湿った指が歯茎に触れた。マスクの中の息遣いが、生々しく聞こえてきた。

どうして彼がわたしの口の中の印象について、そんなふうの説明しなければいけないのか分からなかった。わたしは自分の歯や歯茎についてなど描写してほしくはなかった。

ピンクの粉は最後には粘土のようにまとまった。彼はそれを人差し指と中指で救い上げ、残りの指でわたしの唇をおしひろげながら、奥歯にべっとり塗り付けた。味ではなくただひんやりした感触だけが舌に当たった。彼の指さが、口の粘膜を何度も撫でた。わたしは思い切り、彼の指とそのピンクの塊を噛みしめたかった。

「わたし」が「義兄」と初めて会ったのは、「義兄」の勤める歯科医院であり、この回想には、「義兄」による虫歯の治療を受ける「わたし」の、口の中の触覚に拠る「感覚」が詳細に記録されている。

「わたし」は「歯茎に触れ」る指や、奥歯に塗られた「ピンクの粉」、口の粘膜を撫でる指を、過剰に敏感に「感覚」として捉え、記録に描く。

そして、「わたし」に触れた「彼の指とそのピンクの塊」を噛みしめ

たいとまで記す。

「息遣いが、生々しく聞こえてきた」や「粘膜を何度も撫でた」などは、明らかに、性的な表現が用いられている。「わたし」にとって医者による治療は、性的接触と多分に重ね合わせて認識されていたことがわかる。

「わたし」の嫌う触覚は、「姉」にとって、「好き」な「感触」であった。それは、「姉」が「超音波診断装置」での検査のために「ゲル状の透明な薬」を塗られることを好み、さらにその時の気持ちを「彼に歯型をとってもらうのと、同じような気持ち」と言う部分から分かる。

一方「わたし」は、医者による治療に含まれる性的接触を「感覚」として確実に受け取り、そこに生々しい虫のメタファーを何重にも重ねてその嫌悪感を示すのだ。他方で「姉」は医者による治療を好む。それらの治療とは、「M病院」での治療、「義兄」による治療、さらには二階堂先生による治療だ。「姉」は、二階堂先生の治療について、「自分の身体のために人がなにかを」するということが「たまらなく気持ちいい」と語り、二階堂先生による治療を、「姉の素晴らしい神経を、彼はどんなふうにも撫でつけているのだろうか」と想像する。しかし「わたし」は、二階堂先生を「優秀な精神科医だとは思えない」と批判する。この両者の差異には、幼いころ「M病院」を積極的のぞくことが出来た「姉」と、「臆病だった」「わたし」という差異が受け継がれていると言える。

「わたし」が「虫」に例えた「感覚」による「意識」は、「M病院」、「義兄」、「赤ん坊」によるものであった。「虫」という表現の内側にあったのは、触覚と共に「わたし」に「意識」される性であったのだ。

さらに言うと、「妊娠カレンダー」に描かれる一九九〇年代の「無意識」とは、「母」「娘」のようにどこにも属さない、属したくない、または、属さないことが可能になりつつあった女性が抱く、成長という変化に伴い、何層にも重なった、性を自覚することへの「嫌悪」なのだ。

## おわり」

「妊娠カレンダー」は「わたし」の「感覚」で感じていても理解できない「意識」の記録であり、その「意識」は微細な感覚表現を追うことによって読むことが可能になった。この「意識」は、これまで、「悪意」という言葉でひとまとめにされたり、大きく「妊娠原理」と評価されたりしてきたが、そのような言葉では、表現しきることのできない事が明らかになった。「意識」を既存の言葉で表すことの違和感は、テキストにも記録されている。

「どうだった?」

「二か月の半ば。ちょうど六週め」

「まあ、そんなに厳密に分かるの?」

「こつこつためたグラフ用紙のおかげ」

姉はそういうと、コートを脱ぎながらずんずん家の奥へ入っていった。特別な感慨があるようには見えなかった。

「今日の夕食なあに?」

「ブイヤベース」

「あっそっ」

「イカとあざりが安かったから」

そんなありふれた会話を交わした後のような、あっさりとした感触しか残らなかった。

だからわたしは、おめでどう、というのさえ忘れていた。

しかし、本当に姉と義兄の間に子どもが生まれるということが、おめでたいのだろうか。わたしは辞書で、『おめでどう』という言葉を引きしてみた。——御目出度う(感) 祝いのあいさつの言葉——とあった。

「それ自体には、何の意味もないのね」

とわたしはつぶやいて、全然おめでたくない雰囲気漢字が並んだその一行を、指でなぞった。

引用の場面で、「わたし」は、「姉と義兄」の子供ができたことを聞いたときの自らの「感情」を「おめでどう」という「辞書」にある既存の言葉で表すことをしなかった。「わたし」は、「おめでどう、というのさえ忘れていた。」と言うが、忘れたのは、「わたし」の「わたし」でさえ理解できない「意識」が「おめでどう」を言うことを拒否したからだ。

ここには、人間に「言葉」では表すことのできない、「意識」の存在があることが記されている。そして、それらの「意識」が「言葉」として、存在しない理由として、この「意識」が「文化の基本的価値観」という「無意識」によって排除されていることが挙げられる。「姉と義兄の間に子どもが生まれる」ことを「おめでどう」と言わない「わたし」や、毒入りグレープフルーツを与えるこれらの言動は、初出時、つまり

一九九〇年代の「無意識」によって「言葉」レベルで排除され、さらにその後の論でも「悪意がある」という不適切な言葉によって集約され続けられてきたのだ。

しかし、「物語」テクストという虚構世界は、「わたし」と「わたし」の「意識」を受け入れる。「感覚」による「意識」を詳細に読むことで、「わたし」の複雑に何層にも重なった「意識」の存在は見つかり、確かに存在したことになるのだ。

#### 注

- 1 芥川選評『文芸春秋』第六九卷三号一九九一年三月
- 2 川村湊「今月の文芸書」『文學界』第四五卷六号一九九二年五月
- 3 綾目広治「小川洋子 見えない世界を見つめて」勉誠出版二〇〇九年一月
- 4 「新芥川賞作家特別インタビュー 小川洋子「至福の空間」を求めて」『文學界』第四五卷三号一九九一年三月（聞き手・小川鉄郎）
- 5 高根沢紀子「想像する力——小川洋子作品の魅力」『国語教室』第七八号二〇〇三年一月
- 6 高根沢紀子「小川洋子「妊娠カレンダー」論」『上武大学経営情報学部紀要』第二六号二〇〇三年二月
- 7 津島佑子『寵児』河出書房新社一九七八年六月
- 8 津島佑子「山を走る女」（本紙連載小説）を書き終えて」毎日新聞（夕刊）一九八〇年九月一九日（金曜日）
- 9 石原千秋 解説「一九七八年のセクシユアリティ」『寵児』講談社二〇〇〇年二月
- 10 『現代風俗史年表』昭和二〇年（一九四五）～平成二二年（二〇〇〇）河出書房新社一九八六年九月
- 11 デイラン・エヴァンス・遠藤利彦 訳『感情』岩波書店二〇〇五年二月
- 12 食事をとるという意味では、

「何週間もクロワッサンとスポーツドリンクだけしか口にしていない」言葉が発するという意味では、「お願いだから、その甘ったるいおもちやみtainなクロワッサンって言う言葉は、もう口にしないでほしいの」という記述がそれぞれある。

※本文引用は、「妊娠カレンダー」『文學界』四四卷九号一九九〇年九月に拠る。